CISMOR VOICE 3

Autumn
2005

2-3
CISMOR Month 2005
同志社大学一神教学際研究センター
公開講演月間

4-11
特集 ニューヨーク

ユダヤ人コミュニティとミュージアム
東　自由里

ニューヨークのキリスト教
大林　浩

「アメリカン」イスラーム?
松永泰行

フォトギャラリー

12-13
CISMOR夏期研修プログラム報告
イスラエル宗教・文化研修プログラム
マレーシア異文化理解・語学研修プログラム
シリア語学・異文化研修プログラム

14-15
スタッフ紹介

16-17
研究会報告

18-19
CISMORインフォメーション

CISMOR
Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions

「日本での生活は、いかに私の一神教理解を変えたか」
日　時：2005年3月5日（土）
場　所：同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
発表者：バーバラ・ブラウン・ジクムンド
（同志社大学大学院アメリカ研究科教授）

バーバラ・ブラウン・ジクムンド氏は、1990年から2000年までハートフォード神学校（米国コネティカット州）学長を務め、「アブラハムの宗教（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）」のプログラムを開始した。2001年から2005年3月までは同志社大学アメリカ研究科教授を務めた。CISMOR（一神教学際研究センター）のスタッフとしても活動し、2004年一神教聖職者交流会議においては副議長も務めた。現在同志社大学客員フェロー、ワシントンDCカトリック大学客員研究員。2005年3月には、日本での経験を基に、ご自身の一神教に対する理解について講演していただいた。

講演のはじめに、ジクムンド氏は一神教を理解するために重要な4つの観点を紹介された。1つ目は天地創造教義における多様性の強調について、2つ目は一神教の人間観が社会に及ぼす影響について、3つ目は女性の社会的役割に関する影響について、最後に多宗教社会の形成のために果たした役割について、これら4つの観点である。日本での生活が、これらの観点の重要性を再認識させたのだと氏は語り、それぞれの観点について詳細に論じられた。以下にその4つの観点について要約する。

1）3つの一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）は同じ天地創造の物語を共有している。注目すべきは、そこで神の創造の多様性が語られているということである。例えばバベルの塔の物語は、人間が統一されておごり高ぶるよりも、多様性を認めつつ相互に受容しあうことが重要であると告げている。ともすれば、一神教は「唯一性」に焦点を当てているように捉えられがちであるが、しかし正典からはそういった多様性受容の強調を確認することができるのである。

2）アジア社会に強い影響力を持っている儒教思想は、人間性を肯定的に捉えている。しかし、それが人間に高く過酷な要求を課すことにも繋がってもいる。それに対して一神教は、人間は悪を犯さざるを得ない存在だと捉えており、それだから悪の影響が少ない社会を形成するように努めるのである。この背景には人間の有限性についての深い自覚があり、その人間把握はアジア的儒教的人間把握に比べてより健全であるように思われる。

3）アメリカの女性史を一見すると、一神教的な観念がアメリカ社会における女性の立場について、大きな影響を与えてきたことを知ることができる。宗教改革の「聖書のみ」という原理は、昨今の欧米における女性の社会的地位向上の遠因である。これに対して、儒教の影響下にある日本社会では、未だに女性の社会的役割は否定的に評価されている。日本での生活以前には、ユダヤ教やイスラームは女性を抑圧するものだと思っていた。しかし日本での生活を経て感じたのは、そういった宗教においても、社会に対する女性の役割が保証されているということである。

4）もともとアメリカでは宗教の多元性は好ましいものとは考えられていなかった。しかし、建国の当初から多様な教派を抱えていたアメリカでは、それぞれの教派の権利を確保するために、やむなく他の宗教教派が受け入れられることになった。つまり、多元性の受容は、多元性の評価とは別物であり、当初それはしぶしぶと為されていたのである。しかしそのような多元的状況が、時を経ることで、多元性そのものに価値を認め、多元性を好ましいものとして受け取るという、宗教多元主義を生み出したのである。

ジクムンド氏はこの4つの観点を確認した後に、日本の文化や宗教性に関する所見を述べられた。日本の宗教は多神教であると説明されることが多い。しかし、氏によれば日本の宗教はいかなる類の有神論でもない。神学者P・ティリッヒは宗教の基礎を「究極的関心」に置いた。しかし、日本の宗教にそれは認められない。日本の宗教は表面的であり、時にはレクリエーションのようにも見える。ところが、そういった無宗教的社会である日本での生活が、氏に一神教徒であることの意味を再確認させたのだという。加えて、非言語的コミュニケーションを重視する日本文化の側面が、神を言葉で表現することの不可能性を改めて自覚させたのだと氏は語った。

最後に氏は、「一神教は排他的に自らの真実を強調する」という日本人の一般的な一神教理解の誤りに言及し、現在のアメリカではそのような捉え方が少数であることを強調された。後者は、自らの宗教的確信を自らの「選択」によるものと捉えており、絶対的真理であるが故にそれを確信するのではない。一神教において神は一人であるが、しかし、その神に至るための道は唯一ではなく複数であり、また、神が人間を救済するその仕方もまた複数なのだとして、氏は講演を終えられた。

（高田　太）

「マスメディアと宗教 ── 日本のマスメディアによるイスラーム世界の報道」
日　時：2005年3月12日（土）
場　所：同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
発表者：モスタファ・レズラーズィー
（前アルジャズィーラ東京オフィス・プロデューサー）

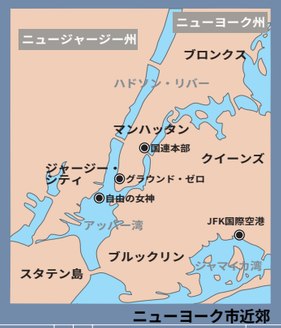
「法・道徳・宗教を考える ── エジプトの近代化を振り返って」
日　時：2005年3月23日（水）
場　所：同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
発表者：タラール・アサド（ニューヨーク市立大学教授）

「聖書イスラエルにおける一神教の再考」
日　時：2005年3月31日（木）
場　所：同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
発表者：ピーター・マシーニスト（ハーバード大学神学部教授）

各講演会の内容につきましては、一神教学際研究センターのホームページ http://www.cismor.jp/ からご覧いただけます。

ニューヨーク

タイムズスクウェア　撮影：高橋　徹



ニューヨーク市近郊

マンハッタン

ニューヨークはアメリカ合衆国最大の都市であり、大西洋岸に位置するニューヨーク州の南東端にある州都である。ウォール街に代表されるように世界経済の中枢でもあり、第２次大戦後は国際連合の本部所在地となった。さらに、大西洋岸に港湾施設を発展させてきたこともあって、海外からの移民の受け入れ先となってきた。

2004年の統計によれば、ニューヨーク市の人口はおよそ800万人、マンハッタンだけで約154万人を数える。ニューヨーク市はマンハッタン、ブルックリン、クイーンズ、ブロンクス、スタテン島の５つの自治区から成る。特にマンハッタンは黒人が多く居住するハーレム、南米やカリブ海地域からの移民が多いスパニッシュ・ハーレム、金融街が並ぶロワー・マンハッタン、インド系移民やウクライナ系移民などが共存するイースト・ビレッジなど、多元的都市を象徴するように区分けされている。一般的に白人中流階級は移民との摩擦を避けるために郊外に居住する傾向があり、黒人やプエルト・リコ系などの貧困層はハーレムやサウス・ブロンクス、ブルックリン中央部、スパニッシュ・ハーレムなどに居住する。ムスリム（イスラーム教徒）やヒンドゥー教徒が多い南アジア系移民はブロンクスに集中する。

ニューヨークにおける宗教人口の割合は、キリスト教徒が75.4%、ユダヤ教徒が10.9%、ムスリムが1.5%、非宗教者が7.4%である。そのうちキリスト教においてはカトリックが43.4%、プロテスタントが27.4%と報告されている（1990年統計）。21世紀に入ると、中東及びアジア系移民が急増し、ムスリムやヒンドゥー教徒、仏教徒などの存在も軽視できない。2000年の統計では、僅か10年の間にニューヨークにおけるアラブ系人口は約39%、南アジア系人口は111%も増加した。合衆国全土に居住するムスリム人口およそ600万人のうち、10分の1にあたる約60万人もがニューヨークに住んでいる。

＜ニューヨークにおける宗教の歴史＞

ニューヨークの歴史の始まりは1609年まで遡る。スペイン、ポルトガルの中南米植民地政策が進んでいた当時、イギリス、オランダ、フランスの3国は北米への進出を競っていたが、大西洋を横断して初めてニューヨークの土地を踏んだのはオランダに雇われたイギリス人のヘンリー・ハドソンであった。マンハッタンの東を流れるハドソン川は彼の名前に由来する。さらにオランダ系移民を乗せた船が1626年にハドソン川に到着し、「ニューアムステルダム」という都市を築いた。「ニューアムステルダム」は当初、プロテスタント改革派によって築かれた都市であったが、北米植民地政策を巡ってイギリスの干渉が強まり1651年に英蘭戦争が勃発すると、イギリスはオランダを破り「ニューアムステルダム」を1664年に奪取した。この時「ニューアムステルダム」はイギリス国王チャールズ2世の弟であるヨーク公の領主植民地の一部となったため、その名にちなんで都市名も「ニューヨーク」となった。その後ニューヨークにはイギリス系移民が流入し、英国国教会の影響力が強まった。その後1775年に始まった英米間での独立戦争を経て、1787年にアメリカ合衆国憲法が制定、憲法修正第1条である信教の自由が保障され政教分離制度が確立し、宗教的多元性はより拡大してゆくことになる。ちなみに少数派のユダヤ教徒はWASP（アングロ・サクソン系のプロテスタント白人）からの排他的姿勢の中でもニューヨークに留まり続け、1729年にアメリカで最初のシナゴーグ（会堂）を建てることができた。

1626年に初めてアフリカ大陸から少数の黒人奴隷が「ニューアムステルダム」に連れて来られ、17世紀後半になってニューヨークにおける黒人奴隷人口は急増し、1730年にはニューヨーク人口の5分の1を占めるまでになった。黒人奴隷たちは独立戦争に参加し、18世紀末に奴隷貿易の規制が次第に高まり、ニューヨークの黒人奴隷たちは1820年までにほぼ自由黒人となった。黒人たちは植民地時代から白人プロテスタントたちによりキリスト教化されてきたが、人種や土着文化の違いからアフリカ的宗教伝統を取り入れて独自のキリスト教信仰を展開していった。18世紀末から19世紀初頭にかけてアフリカ・メソジスト監督教会やアビシニアン・バプテスト教会などのいわゆる「黒人教会」がハーレムに建設されていった。

1830年代になるとアイルランドで大飢饉が起こったために、ニューヨークはアイルランド系カトリック教徒で溢れた。アイルランド系移民の多くは知的教育を受ける機会が少なかったカトリック教徒であったため反カトリック運動が高まった。またフランス系移民のカトリック教徒は知的水準も高く、貴族的な資質を持っていたため、同じカトリック教徒でも互いに相容れなかった。それでもカトリック教徒たちはアメリカ社会への同化に努め、反カトリック感情を乗り越えていった。1885年以降になると一世代遅れてイタリア系カトリック移民が急増する。しかしながらアメリカ・カトリック教会の聖職権はほとんどアイルランド系カトリック教徒によって占められていたため、イタリア系カトリック移民はカトリシズムに関心を持たなくなった。さらに20世紀に入るとプエルト・リコ系移民の多くがカトリック教徒としてアメリカに渡ってくるが、すでにカトリック教会の聖職権は他のエスニック集団（民族集団）によって独占されていたこともあって、プロテスタント信仰を受け入れ、ペンテコステ派に改宗する者も多かった。

アメリカへのユダヤ系移民は、その出身地と時期によって主に3つに分類できる。最初にニューヨークに到着したのはスペイン・ポルトガル系移民で、正統派ユダヤ教徒であった彼らは信仰を堅く守りつつも、アメリカ文化に同化していった。さらに1820年代から1880年代まで、ドイツから貧困と重税が主な理由で多数のユダヤ系移民が流入してきた。このドイツ系ユダヤ移民のほとんどが改革派ユダヤ教徒であり、アメリカ社会にも適応できた。19世紀末から20世紀初頭にかけてはロシア・東欧からのユダヤ教徒が移民として多数ニューヨークにやってきた。彼らの多くが非常に伝統的なユダヤ教徒であり、アメリカ文化への同化は容易ではなかった。

1920年代になると、黒人による市民活動や宗教運動が活発になる。その理由としては1920年移民制限法によって、東欧・

南欧からの移民が減少し、さらに労働の機会を求めてアメリカ南部からニューヨークへ向けて多数の黒人たちがハーレムに「大移動」したことが挙げられる。1913年には合衆国で初めてのムスリム組織である「ムーリッシュ・サイエンス・テンプル」が設立され、ニューヨークにもイスラームの潮流が見られるようになった。

黒人に対する人種差別が続く1930年代から40年代にかけて、ハーレムを中心に黒人キリスト教徒たちが団結してストライキやボイコット運動などを展開していく。1950年代後半から60年代前半にかけ、マーティン・ルーサー・キング牧師が公民権運動に火をつけると、ニューヨークの黒人キリスト教徒たちも大きく影響され、非暴力直接運動に従って人種差別に抵抗した。しかし1968年にキング牧師が暗殺されると、非暴力的な抵抗運動に限界を感じ始めていた黒人たちはニューヨークなど都市部において暴動を起こし始めた。1930年に創設された「ネイション・オブ・イスラーム(NOI)」は1960年代後半になると白人を悪魔的存在と捉え、黒人こそ優れた民族であるという独自のイスラーム神学を説いた。当時NOIの中で特にカリスマ的リーダーであったのがマルコムXであり、彼の活躍によってハーレムを中心に「白人の暴力的差別には武力で抵抗を」というブラック・ムスリム運動が興隆した。しかし、あまりに過激だったブラック・ムスリム運動も次第に衰退し、マルコム自身が正統派イスラームに改宗すると、多くの黒人たちも正統派イスラームに傾倒していった。

また、ジョン・F・ケネディが1961年にカトリック教徒として初の大統領に就任したことが象徴するように、WASP的伝統は希薄になり、20世紀半ばにはプロテスタント、カトリック、ユダヤ教は大同団結し、いわゆる「ユダヤ・キリスト教的伝統」を築きあげるが、有色人種のキリスト教徒やムスリムはニューヨークの宗教的主流からは排除され続けた。

＜9・11テロリズムとその後のニューヨーク社会＞

2001年9月11日、ニューヨーカーは勿論のことアメリカ全国民や世界中の人々を震撼させた同時多発テロが起きた。結果として世界貿易センタービルは崩壊し、犠牲者はおよそ4000人近くにのぼった。現在世界貿易センタービル跡地は「グラウンド・ゼロ（爆心地）」と称され、新たに「フリーダム・タワー」というビルを建設中であり、完成すれば約540メートルという世界一高いビルとなる。

しかしながら同時多発テロ後、ニューヨーク市民の自由が多くの面において危機に晒されてきた。テロ直後、合衆国での国内安全保障への関心と必要性が急激に高まり、2001年10月にブッシュ政権は「愛国法」に署名した。愛国法は国内におけるテロリスト排除を目的に、正当な手続きなしでのテロリスト容疑者の逮捕・拘留などを認め、これによりFBIやニューヨーク市警、移民帰化局等は過剰な権力を手に入れたといえる。その結果、ニューヨーク市民であるムスリム、アラブ系や南アジア系の人々はしばしば「宗教・人種プロファイリング」の標的となっている。

9・11以降、街を歩くムスリムやアラブ系の人々が通行人に唾を吐きかけられたり、時には暴力を振るわれたりと、いわゆる「ヘイトクライム（憎悪犯罪）」も急増した。2003年の夏にニューヨーク市の人権委員会がニューヨークに居住する1200人以上のムスリム、アラブ系、南アジア系に宗教・人種差別の調査を実施したところ、約70%が何らかの差別的扱いを受けていると答えた。そのうち、最も多いのが偏見による差別と暴力であり、他には職場での不平等な扱いやレストランや学校などの公共施設における差別などが報告されている。ムスリム女性がアメリカ国内に入国する際に、ヒジャーブを強制的に取られることなどもあった。このような行為は明らかに合衆国憲法修正第1条にある信教の自由に反するとの声も上がっている。このような差別的な扱いを受けて、ムスリム団体やアラブ系市民団体等はただ沈黙しているだけではない。例えば、最近ブロンクスを中心にムスリム宗教指導者がニューヨーク市人権委員会と協力し、宗教・人種差別と闘っている。また、全米教会協議会のニューヨーク支部もキリスト教徒、ユダヤ教徒、ムスリムが互いにより良く理解できるよう異宗教間対話に努めている。

アメリカ合衆国は日本やヨーロッパ諸国に比べれば歴史こそ浅いが、僅か約400年の間に様々な人種・民族が交錯し続けてきた多元的国家である。その多元性を最も代表する都市のひとつがニューヨークであり、マンハッタンを中心に様々な人種や民族が共存している。それ故、ニューヨークには様々な宗教がひしめきあっているのである。

（高橋　徹）

グラウンド・ゼロとワールド・ファイナンシャル・センター　撮影：志賀恭子

主要参考文献

“Religion Statistics, Church Statistics.” http://www.adherents.com/ (accessed on June 1, 2005).

New York City Commission on Human Rights. *Discrimination against Muslims, Arabs, and South Asians in New York City Since 9/11*. Summer, 2003.

Diana L. Eck. *A New Religious America: How A “Christian Country” Has Become the World’s Most Religiously Diverse Nation*【池田智訳『宗教に分裂するアメリカ－キリスト教国家から多宗教共生国家へ』(明石書店、2005年)】.

Gaustad, Edwin Scott and Philip L. Barlow. *New Historical Atlas of Religion in America*. New York: Oxford University Press, 2001.

Weil, Francois. *A History of New York.* New York: Columbia University Press, 2004.

正井泰夫、山本泰男他「ニューヨーク」『アメリカを知る事典』斉藤眞他監修（平凡社、2000年）、352-58項。

ユダヤ人コミュニティとミュージアム

東　自由里
（ひがし　じゆり）

ニューヨーク大学大学院博士課程修了
Ph.D.　国際教育学。
立命館大学教授。

ニューヨークのマンハッタンは、世界的な金融都市であるだけでなく、合衆国最大の多文化・多宗教都市でもある。チャイナタウン、リトルイタリア、リトルインディア、リトルウクライナなどのエスニック・コミュニティが密集しているロワー・イーストサイド(Lower East Side)はその典型的な地区である。この街はいつも可能性を秘めていて、活気に満ち溢れている。異文化間の衝突が常にあるのも事実だが、他方で、多宗教・多文化の共存をめざす文化事業が繰り広げられ、分断しかねない街をしっかりと繋ぎとめている。

ロワー・イーストサイドは、19世紀後半から20世紀初頭まで、主として東欧からきたユダヤ人移民の集住地区であった。実際、全米最大数のユダヤ教徒がこの地区に密集していたという。しかし、経済的に成功を収めたユダヤ人たちが地区外に転出するにしたがって、その人口は急減した。今日では、勢いよく拡大するチャイナタウンに飲み込まれつつある。シナゴーグ（ユダヤ教寺院）、かつてのイーディシュ語の新聞社、かつての劇場など、一部の建造物だけが、ユダヤ人コミュニティの面影を残している。

そんななかで、ユダヤ人コミュニティと他のコミュニティとの共存のあり方を模索する動きが注目され始めている。ロワー・イーストサイドの小さな通り、エルドリッジ・ストリートには、正統派ユダヤ教徒のために宗教施設として現在も使用されている唯一のシナゴーグが建っている。このシナゴーグは、東欧から移住してきたユダヤ人たちによって1887年に建設された。1940年代ごろまで、コミュニティと共に繁栄期が続いた。しかし、合衆国政府が国ごとに移民数を制限する法律を1924年に制定したことによって、新たに転入するユダヤの数も減少し始めた。やがてユダヤ人たちは他の地域に移り住み、シナゴーグの維持と修理は以前のようには行われなくなった。長い間放置され、半ば廃墟と化していた。

コミュニティの象徴でもあり、多くのユダヤ人移民の心の支えでもあったこのシナゴーグを「再生」させるため、1986年、一握りのニューヨーカーたちによって非営利団体が立ち上げられた。その名称は「エルドリッジ・ストリート・プロジェクト」である。

10年後の1996年、このシナゴーグは歴史的建造物に指定された。以来、薔薇窓、ステンドグラス、天窓、ヴィクトリア様式の電燈などを修復する事業が着実に展開されている。

金曜日から土曜日にかけてはユダヤ教の安息日であり、会衆がこのシナゴーグを使用する。それ以外は一般公開されている。1990年初頭に公開して以来、25万人が訪れている。

2005年の春、このシナゴーグは「エルドリッジ・ストリート・ミュージアム」となった。ミュージアムといっても「展示」が行われているわけではない。シナゴーグに会衆が集っていた最盛期の様子を再現しようと試みているだけでもない。歴史的建造物の保存事業を通じて、ここを訪れる人々に、過去と現在の移民たちの暮らしと生き方の接点を想像してもらおうというのが狙いだ。

運営を担っている非営利団体は市と州からの補助金を受けているためユダヤ教の布教活動はできないが、シナゴーグで展開される異文化共存プログラム、とりわけ近隣のチャイニーズやヒスパニックの移民を巻き込んだ地域に根ざした文化施設としての役割を果たそうとしている。

また、マンハッタン47丁目のダイヤモンド街では、黒い帽子、黒いコートをまとい、ひげを剃らない「超正統派の中のハシディック」と呼ばれるユダヤ教徒を多くみかける。彼らの多くはブルックリン地区のクラウン・ハイツに居住している。私が大学院生だった1991年、この地区に住むハシディックの運転手が、アフリカ系アメリカ人との間で起こした交通事故を発端に近隣コミュニティの間では衝突が絶えなかった。超正統派のユダヤ人コミュニティは、その規律と伝統を重んじた生き方ゆえに近代的な街では「閉鎖的なコミュニティ」と見られがちである。ところがクラウン・ハイツにこの春、「ユダヤ人子どもミュージアム」が開館した。ユダヤ人以外の子供たちにできるだけ多く訪れてもらい、ユダヤ教の祝日の意味などを理解してもらおうというのが狙いだ。近隣のアフリカ系の子供たちでいっぱいになる日もあるという。今のところ、世界で唯一の子どものためのユダヤ人ミュージアムである。

エルドリッジ・ストリートのシナゴーグ正面　撮影：東　自由里

ニューヨークのキリスト教

大林　浩
（おおばやし　ひろし）
ニュージャーシー州にあるラトガース大学宗教学教授。1967年就任以来現在に至る。
神学、宗教学担当、日米両国ならびにイスラエルにおいて教鞭をとり、アメリカ宗教学会の全国理事、ミッド・アトランティック支部長なども歴任。

9・11事件のすぐ後、2001年9月23日にジュリアーニ市長の依頼で、ヤンキー・スタジアムに於て、ニューヨークの多くの宗教共同体、キリスト教、ユダヤ教だけでなく、今では人口でも力を増しつつあるイスラム、ヒンドゥー、シーク等の共同体にも呼びかけて、一大祈祷会が開かれた。ムスリムに対する風当たりを防ぎ、彼らの安全を願うと共に、テロ攻撃の犠牲者の魂のため、またこの危機を乗り越える市の為に祈りを一つにした。ムスリム、ヒンドゥー、シークの聖職者に加わってキリスト教、ユダヤ教の牧師、神父、ラビたちも祈りで力を合わせた。その中の一人、ミズーリ宗会（Synod）ルーテル教団の大西洋岸教区長であるブルックリンのベンキー牧師も壇上に登り真摯な祈りを添えた。ところが数日も経たぬうちにミズーリ州の本部からベンキー牧師に停職の辞令が届いた。キリスト教の祈りを他宗教の教師たち同席の場で捧げて、福音を汚した行為、他宗教の神々を認めた背信の行為として糾弾されたのである。アメリカにはこうした声がまだまだ多く残っている。ミズーリ宗会（Synod）のルーテル教団はウィスコンシン州のそれと並んで多くあるルーテル教団の中でも特に保守的である。恐らくそうした保守的キリスト教の力の方が未だに強いのではなかろうか。しかし、ニューヨークは異なる。キリスト教が前進的に多くの宗教と和して行こうと最先端を走る場所である。現に、（我々のラトガース大学が2005年9月25日に全学で迎えたそのすぐ翌日）ニューヨークのリバーサイド教会はチベット仏教のダライ・ラマ師を迎えて宗教間の理解協力の会を催すことになっている。

リベラルなメインラインのキリスト教が影響力をうしなった理由の一つには、保守政治の政策の一環として、報道の極端な自由化が執行されたことにある。以前は限られた数の主要テレビでメディアの基準と良心的な報道が保たれていたが、レーガンの時代には全国にテレビ局が林立し、その多くを財力に恵まれた保守的キリスト教が買い取り福音放送局とし、電波を通して保守的乃至（ないし）ファンダメンタリスト的メッセージを流し続けていることにある。そうした、はしたないやり方に訴えることも、財力にも恵まれないリベラルは次第に勢いを失って行った。しかし原因はリベラルの側にも考えられる。それはリベラルな教会の宣教が社会の共通善に対するメッセージを明らかにしていないことにある。福音を正しく語るならば社会の根本的な問題への態度が自ずと明らかになる筈である。共通善への福音の態度は中世カトリック、特にアクイナスの神学においては明確に示されていた。それが鈍るとキリスト教のメッセージは周辺的問題へと引きずられていく。ゲイ（同性愛者）同志の結婚とか、人口中絶、堕胎の問題とか、それ自体たしかに重要な問題ではあるが、キリスト教のメッセージの中心ではなく、社会の共通善に対する福音のメッセージを正確に捉えておれば、己ずと態度が明らかになるであろう諸問題である。そうした周辺的問題へとキリスト教が押しやられることによって、メインラインの声が薄くなった。右派のキリスト教は正にそのような焦点の横取りによって勢いを増し、最近の共和党政治を推進して来た。

リベラルは福音をその本筋に戻し、社会の公共善の核心に向かって語りかけなければならない。その兆しがあちこちに感じられる、ニューヨークの聖公会ゼネラル神学院は最近デズモンド・トゥトゥ研究所の定礎式を終えた。世界の平和のために、諸宗教の和解、世界の紛争勢力の和解の為の研究、研修の場となることを目指している。NCCは2005年7月にアメリカのイラク政策に向かって確固たる態度を示し、戦争反対の声明を公にした。

終わりに希望の光を投げかける小さな教会についてお知らせしたい。それはWTCの巨大なツインタワーの瓦礫の中に消えたギリシャ正教の聖ニコラス教会のことである。1832年にその地に建てられた、間口7メートル奥行き17メートル程の住宅を1916年にギリシャ人移民たちが買い受けて開かれた教会、一世紀近く、ニューヨークのギリシャ人及びニューヨークを訪れるギリシャ人たちに親しまれ愛されてきた教会であった。ツインタワーに付随する数々の巨大な建物に囲まれて、小さくはあるが、立派に教会として使命を果たしてきた教会である。しかし辺り一帯が瓦礫と化した時には、その灰燼の中からは、教会の一冊の本、聖壇にあった小さなベル、そして塔の鐘しか堀り起こされなかった。その小さな教会を守って来た人たちは、WTCの跡に記念碑や新しい建物が聳え立つ時には再びその間に小さな姿を見せたいと今頑張っている。キリスト教の力はそうした小さい教会から湧き出るものである。その教会の復活によって奮い立たせられなければならない。（一部抜粋。フルテキストは一神教学際研究センターのホームページ http://www.cismor.jp/からご覧いただけます。）

アムステルダム通121丁目から見た
リバーサイド教会　撮影：高橋　徹

「アメリカン」イスラーム?

松永泰行
（まつなが　やすゆき）
ニューヨーク大学（NYU）大学院政治学科博士課程修了。在イラン日本大使館専門調査員、日本大学国際関係学部助教授を経て、現在同志社大学一神教学際研究センター客員フェロー、米国在住。専門は比較政治学、国際関係論、中東・イスラーム研究。

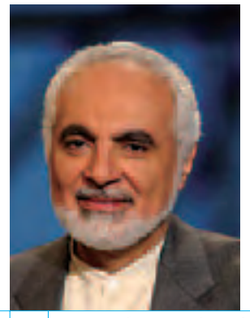
妙な巡り合わせで、2001年9月11日と同様、ロンドンの地下鉄を対象とした同時爆弾テロ事件が起こった2005年7月7日も、ニューヨークに滞在していた。同事件を契機として、アメリカ国内においてイスラームやムスリム対する新たなバックラッシュが起こるかとも思ったが、対象が（主要同盟国の首都とはいえ、所詮外国の）ロンドンであったためか、あるいはイラク駐留米軍に関する絶え間ない凶報（戦死者の報）の連続で世論が既に麻痺しているためか、世論においてもメディアや言論界においても、特筆される反応は見当たらなかった。

例外的に耳に留まったのは、事件翌日の夕方のアメリカの公共ラジオ（NPR）のニュース番組で流れたあるコメンタリーであった。論者は、カナダのトロント大学フェローで、『今日のイスラームの何が問題か』の著者であるイルシャード・マンジ（Irshad Manji）。内容は、いつになったらムスリム指導者たちは「否認」状態から抜け出し、問題の根本に向き合うのか、というものであった。名指しはされていなかったが、彼女の批判の対象となっていたのは、マンハッタン南部の旧世界貿易センタービルの近くの小さなモスクの導師で、「9・11」事件後に在米穏健派ムスリム指導者として知られることになったイマーム・フェイサル（Imam Feisal Abdul Rauf）の「7・7」事件に対する反応であった。

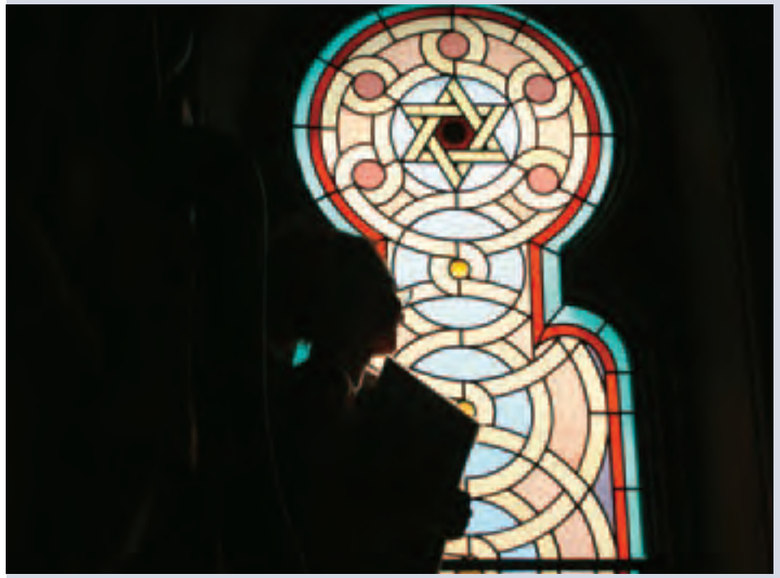
ケンブリッジ大学とロンドン大学大学院で学び、各国でイスラミック・センター長を歴任したエジプト出身の宗教学者ムハンマド・アブドゥルラウーフを父とする当年57歳のイマーム・フェイサルは、欧米社会における「文化大使」としては第2世代である。「9・11」事件後にアメリカのメディアに登場し始め、2004年5月に出版した『イスラームについて正しいことは、アメリカについて正しいことと同じ』と題された著書の中で、在米ムスリムは（アメリカ社会の根本的価値観と整合する）「アメリカン」イスラームを、世界中のムスリムに浸透させる義務があると論じている。アメリカだけでなくオーストラリアなどでも活発な講演活動を続けているイマーム・フェイサルは、「7・7」事件の直前の7月初めには、イスラームの寛容とシヴィリティのメッセージを発信するとして、ヨルダン国王のアブドゥッラー二世の肝いりでアンマンにおいて開催された国際イスラーム会議に、自らが発起した（アメリカとイスラーム世界の関係修復のための）「コルドバ・イニシアティブ」（Cordoba Initiative）の代表として出席したばかりであった。革命後イランにおける宗教と政治を勉強している筆者などは、「アメリカン」イスラームといわれると、イスラームについての誤った解釈の究極的表現としてホメイニー師が常套句にしていた「イスラーム・アムリカーイー」（「アメリカ版イスラーム」）という言葉を思い出してしまうが、17歳の時からアメリカで暮らしているイマーム・フェイサルは、アメリカ発のイスラーム改革が必要であると真剣に唱えているようである。

批判の対象となった反応とは、イマーム・フェイサルが自己のウェブページ（www.asmasociety.org）上で発表した、「ロンドンのテロ攻撃」を「人類に対する犯罪」として非難する、六段落からなる声明文であった。その冒頭でイマーム・フェイサルは、「人を殺した者は…全人類を殺したのと同様である。人の命を救った者は、全人類の生命を救ったのと同様である」（中略声明文のまま）という『クルアーン』食卓（アル・マーイダ）章第32節を引き、「憎悪をかき立て、さらなる暴力を生み出すことを唯一の目的とする狂信者による宗教の悪用を非難する」と述べていた。

マンジの批判は、その中略部分に向けられていた。『クルアーン』の原文は、「人を殺した者は」に続いて、「人を殺した、あるいは地上に腐敗を広めたとの理由での場合を除いて」という条件が付いているにも関わらず、穏健派を自称するウラマー（イスラーム学者）は、その部分を都合よく省略しながら（彼女の言葉では「消毒しながら」）啓典を引用している、とのものであった。マンジの主張は、殺人の同害報復としての殺人を容認している（彼女がいうところの）「啓典の罪」と向き合うことなしに、イスラーム共同体は宗教の名の下で無差別殺人を犯すムスリム過激派の問題を解決することはできない、というものである。ウガンダ生まれのインド系ムスリムであり、カナダの公共テレビのホストとして名をなしたマンジは、「ムスリム・リフューズニーク」を自称し、サルマーン・ラシュディーらと交遊するなど、かなり挑発的な言動で知られている（www.muslim-refusenik.com）。しかし、究極的な内側からの批判としてこの発言を行っていると主張しているマンジは、同様の批判的態度で聖書と向き合っているプロテスタントの牧師の存在を引きながら、イスラームのウラマーはいつになったらこの「啓典問題」に取り組むのかと、問いかけている。この問いは、筆者のような非ムスリムの一研究者にはコメントするにはあまりに重いものであるが、イマーム・フェイサルはどう答えるのであろうか。（2005年7月20日記）



フェイサル・アブドゥルラウーフ師
写真提供：ASMA Society



エルドリッジ・ストリートにあるシナゴーグ　撮影：東　自由里

セントラル・シナゴーグ　撮影：東　自由里

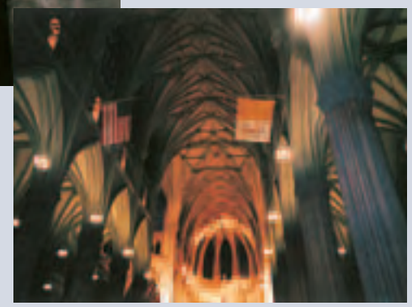
リバティ・フェリーから見たロワー・マンハッタン　撮影：高橋　徹

聖パトリック教会　撮影：高橋　徹

エマニュエル寺院　撮影：東　自由里

グラウンド・ゼロ　撮影：井野真由美

ニューヨーク・イスラーム文化センター
撮影：松永泰行



聖パトリック教会内部　撮影：高橋　徹

イスラエル 宗教・文化 研修プログラム（8月2–11日）

中村明日香
同志社大学COE研究指導員

昨年実施されたイスラエル研修に続き、アダ・コヘン同志社大学神学部助教授がコーディネーターとなり、2005年は学生対象の研修プログラムが実現した。神学研究科から8名の大学院生が参加した。

今回の研修は、イスラエル国内における一神教の多元的現状の視察を主な目的とし、エルサレム、ハイファ、ガリラヤ湖周辺などの宗教機関や大学・研究機関を訪問した。主なスケジュールは下記のとおりであった。

8月3日　エルサレム旧市街視察。ルーテル派教会訪問。シェヒター・ユダヤ学研究所において保守派ラビによる講義を受ける。
8月4日　ヘブライ大学人文学部において講義を受ける。大学構内見学。イスラエル博物館見学。
8月5日　ヤド・ヴァシェム（ホロコースト博物館）見学。アイン・カーレム村、ムスリムのアブー・グシュ村、キブツ・ツバ訪問。エルサレムのシナゴーグで、カバラット・シャバットに参加。ヘブライ大学学生との交流。
8月6日　マサダ、クムランなど死海周辺地域視察。
8月7日　バカ・ル＝ガルビーヤのアル・カーセミー教育大学訪問。ハイファに移動、バハーイー派センター、カバビールのアフマディーヤのモスクを訪問。

マサダから見た死海

ルーテル派教会で説明を聞く一行

8月8日　ドルーズ派のウサフィーヤ村視察。ナザレおよびガリラヤ湖周辺の教会を視察。ヨルダン渓谷経由でエルサレムへ移動。
8月9日　ヘブライ・ユニオン・カレッジ視察。改革派ラビからユダヤ教改革運動に関する講義を受ける。エルサレム新市街視察。

「ヨルダンおよびホーリー・ランド福音ルーテル派教会」は、エルサレムの旧市街にある「贖い主教会」を本部とし、ベツ・レヘムやベイト・ジャラ、アンマンなど6つの教会で構成されている。我々は今回、A・ユーナーン教区長から教区の概要説明を受ける機会に恵まれた。「私はルーテル派のキリスト者であり、パレスチナ系アラブ人です」※と自己紹介をする同教区長は、今年の3月にこの国の「現状を受け入れなければならない」という判断の下に、教会名に「ホーリー・ランド（聖地）」を加え現在のものに改名した。以前の名称（「ヨルダン福音ルーテル派教会」）は、教会の多くが西岸に位置し、第三次中東戦争まではヨルダン側に属していたことに由来した。同教区長は宗教間対話に積極的に取り組んでいるが、キリスト教だけでも13宗派が会する聖地エルサレムで、ましてや宗教間の対話は決して簡単なことではないようである。同教区長の不断の対話の試みや、バカ・ル＝ガルビーヤのムスリム、そしてシナゴーグに集う人々などとの一連の面会などから、真に平和を願うことの非常な勇気の存在に気づかされた。

※イスラエル国家人口の民族的比率はユダヤ人77%に対し、アラブ人は約23%とされる。宗教的にはユダヤ教徒77%に対し、キリスト教徒は2%未満であり、これはキリスト教徒のほとんどがアラブ系であることを示している。このうちプロテスタントは少数派であり、A・ユーナーン主教自身は国連パレスチナ難民救済事業機関発行の難民認定書保持者である。パレスチナ系アラブ人はこのように難民となっている人を含めて世界に947万人いると報告されている。

マレーシア 異文化理解・語学 研修プログラム（8月1–15日）

森山　徹
同志社大学大学院神学研究科後期課程

今回の研修の大半（8日間）は、マレーシア国際イスラーム大学（IIUM）で過ごした。そこでの内容は、主に英語学習とイスラーム理解である。英語学習は、学術論文の書き方と口頭発表の仕方の組織的な講義を受けた。各学生とも、それぞれのテーマに従って英語の文献を調べ、英語で文章を構成し、英語でプレゼンテーションを行った。慣れない作業に連日夜遅くまで準備をすることもあったが、組織的な講義と実際に現場へ赴いての調査や体験などがあったこともあり、実のある内容となった。イスラーム理解は、一貫して「イスラームとは何か」というテーマの下に行われた。これらの講義を特色付けたのは、講師陣の出自にあった。カトリックやヒンドゥーから改宗した人、あるいはマレーシア以外にも、インドネシア、タイ、中国、スーダンなどの国籍を持っている人が、その経験を踏まえつつ「イスラームとは…」と語るその内容は、殊更バラエティーに富んでおり、賛否分かれつつも耳を傾けさせるものがあった。

大学での研修の合間にはマラッカでのホームステイがあり、ここではマレーシアの人々の暮らしの一端に触れることができた。とりわけ目を引いたのは、その自然の豊かさであった。ほんの数年で成長し生産に回すことができるゴムの木やパーム椰子、またいたるところにたわわな実を結んでいる見たこともないような果樹の数々は、まさに「楽園」という言葉を髣髴させた。滞在二日目には、羊の伝統的な屠殺と解体を直に見ることができ、村人達と分かち合う貴重な経験も得ることができた。

ザバハ（屠殺）の実習

マラッカの果樹園にて

それ以外にも、日々の何気ない生活の中に、日本とは全く異なるイスラームの浸透した生活の端々が垣間見えた。例えば、日に五回、決められた時間に校内中に響き渡るアーザーン（礼拝への呼びかけの言葉）や、老若男女、人種、階級を問わず地に額を付けて祈る礼拝の風景、その他にも食べ物、挨拶、服装など。今回のこの研修で得た経験の一つ一つが、今後の研究の豊かな糧となることを願っている。

8月1日（夜）　クアラルンプールに到着、オリエンテーション
8月2－5日（クアラルンプール）　IIUMで研修
8月5（夕方）－7日（マラッカ）　アンジョンボンダでホームステイ
8月8－12日（クアラルンプール）　IIUMで研修
8月12（午後）－14日　マレーシア市内視察
8月15日（朝）　帰国

モスクのゲストルームにて

シリア 語学・異文化 研修プログラム（8月16–28日）

横田　徹
同志社大学大学院神学研究科後期課程

2005年8月16日から28日にかけて、シリア・アラブ共和国において夏期研修を行った。この研修では、一神教の地域、特にイスラームが支配的な地域を訪問し、現地の宗教事情を見学し、理解を深めることを目的としている。本研修には、後期課程の学生から学部生、さらには神学研究科のみならず、他研究科・他学部に所属している多様な学生が参加する機会を得た。大まかな日程は以下の通りである。

8月16日　出発
8月17日　現地到着
8月18日　司法省・宗教省見学－アブヌール学院訪問ならびに講義
8月19日　キリスト教教会訪問とアブヌール学院モスクにおける礼拝参加
8月20日　シリアカトリック教会訪問ならびに講義
8月21日　シリア国会訪問・JICAシリア事務所訪問ならびに講義
8月22－24日　アレッポ周辺への小旅行
8月25日　マアルーラ訪問と講義
8月26日　パルミラ訪問
8月27日　シリア出国
8月28日　帰国

パルミラの遺跡

研修最終日のホテルにて

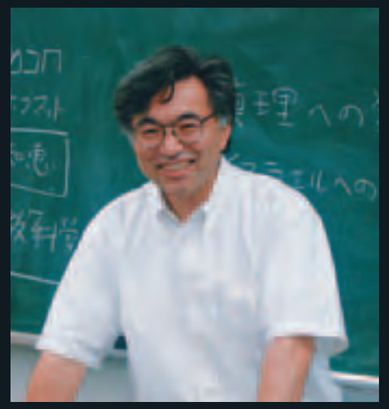
本研修では、首都のダマスカスを中心に中東における多様な宗教事情を見学することに加えて、アラビア語研修のみならず、JICAシリア事務所をはじめ、様々な形でのレクチャーをしていただき、生の一神教世界をさまざまな角度から体験することを主眼としている。CISMORとも提携があるクフタロウ財団・アブヌール学院の協力の下、ダマスカス大学教授をはじめとして、多くの方々に興味深い講義をしていただいた。また、同志社にもなんどか来校しているクフタロウ博士とも再会を果たし、有益な研修となった。博士のおかげで、シリアの宗教大臣とも面会をすることができ、立派な装丁のクルアーンもいただいた。

印象的であったのは、出会う人々の暖かさである。シリアの人々は日本人を見ることに慣れていないせいか、目が合った瞬間などはぎこちない表情をみせるものの、挨拶をし、笑顔を見せるとこちらが驚くほどの親しげな笑顔を返してくれる。多くの人はこれをアラビック・ホスピタリティであるという。これは、彼らの持つアラブ人としてのアイデンティティがそうさせるようだ。

シリア・アラブ共和国は、日本からは地理的にも心理的にも近いとは未だ言えないが、この研修を機にさらなる交流と研究を深めていければよいだろう。

スーク（市場）・ハミディーエ

手島勲矢



今年から、同志社神学研究科でユダヤ学研究１を教え始めたことがよい刺激となって、イスラエルとアメリカで過ごした留学時代の学びの整理をさせられています。日本とユダヤ・イスラエルの情報ギャップを埋めるには、まだまだヘブライ語に通じた人数が日本に足りません。その意味では、同志社のはじめているユダヤ学やヘブライ語教育の取り組みは、注目に値します。来春、様々なところで発表してきたものを一冊にして（『ユダヤの宗教思想』岩波書店）出版するべく、目下奮闘中です。これからも、ユダヤ的な聖書解釈や歴史哲学の伝統に依拠しながら、文明間の発想の違いや近代の問題について考えてみたいと思っています。

※手島先生は 2006 年４月、同志社大学神学研究科にユダヤ学担当教員としてご着任のご予定です。

細谷正宏

2001 年９月 10 日朝９時過ぎ、ワシントンの空港から日本に向って飛び立った。関西空港に着いたのは翌 11 日の午後４時前、帰宅したのは７時頃だったろうか。夕食後まもなく睡魔が襲ってきたその瞬間だった。ニューヨークの世界貿易センターにハイジャックされた旅客機が激突したというニュースが流れた。もう１機も世界貿易センター、他にペンタゴン、ペンシルバニアに。

ペンタゴンに激突した１機は、航空会社は違うものの、私が前日飛び立った空港からほぼ同じ時間に離陸した旅客機だった。睡魔は完全に消え、直前ワシントンで会った人々の無事を電話で確かめたが、逆に私の身を案じられた。一日違いで私自身も巻き込まれたかもしれないという運命を実感した。

こうして９・11 は私の人生できわめて重い存在となった。世界は根本的に変ってしまったと痛感せざるを得ない。さまざまな宗教、民族、ナショナリズム、紛争、国内政治、国際関係…絡み合った糸を解くように、地道な個人研究と学際的な共同研究、そして新たなパラダイムが要請されている。

中田　考

私の学問の目標は、（１）日本に向けて、ノイズを交えずに唯一なる神の実在を発信すること、（２）イスラーム世界に向けて、ヒラーファ（カリフ制度）の再興の義務を示すこと、（３）全世界に対して、領域国民国家 (territorial nation-state) の廃絶を訴えること（先ずは国境の廃止から）、です。

他者との相互理解の可能性に絶望しているので、人前で話をするのは大嫌いです（授業は特に嫌いです）が、論文、口頭発表の大半は同志社大学中田ゼミ公式ホームページ上で読むことが出来ます（http://www1.doshisha.ac.jp/~knakata/）。

2005 年中には監訳した古典クルアーン注解『タフスィール・アル＝ジャラーライン（ジャラーラインのクルアーン注釈）』全３巻が完結の予定です。

山本雅昭

CISMOR ではぼくの研究領域はいちおう「ユダヤ文学」ということになっていますが、これは正確ではありません。ぼくの研究対象は、ただしくは「ドイツ文学におけるユダヤ的なるもの」と言わなければなりません。そもそもぼくはドイツ文学（ドイツ現代小説）の研究者なのです。1950 年代あたりから少しずつ遡っていき、20 年代、10 年代、そして世紀転換期へといろいろな作家の小説を読んでいるうち、あるときふと自分がほとんどユダヤ系の文学者ばかりを相手にしていることに気づきました。もちろん研究という仕事の性質上そこに一定の系統だったものをめざすのは当たり前の話で、ぼくも研究の柱のようなものは立ててはいましたが、しかしそれとユダヤとは必ずしも結びつかない、少なくともそんなことを意識したことはそれまでありませんでした。この発見はだから新鮮な驚きでした。無意識のうちに歩んでいたこの軌道――ぼくのユダヤへの意識的な接近が始まるのはいまからまだやっと 10 数年前のことです。

部門研究1
「一神教の再考と文明の対話」研究会

第1回研究会（2005年5月28日）
場所：同志社大学　今出川キャンパス
寒梅館6階会議室

「ラビ・ユダヤ教のパラダイムシフト――神殿崩壊と賢者の政治理論」
手島勲矢（大阪産業大学人間環境学部教授）
「現代ユダヤ教の権威構造と正典解釈――近代国家と民主主義をめぐって」
市川　裕（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

手島氏は、最初に「歴史の学」について触れ、それは本来異なる意見をもつ人々を結びつける「共通の場」であり、この点においてユダヤ学者もキリスト教の歴史学者も、方法論や事実の究明という目的を共有していると述べた。この「歴史学」の場において、ユダヤ学者とキリスト教の歴史学者の視点の相違が最も顕著に現れるのが「第二神殿時代のユダヤ教」の問題であり、この視点の相違は「歴史の出発点と終着点の設定の問題」「時代区分を言い表す用語の問題」「ユダヤ教をめぐる神学的、哲学的な問題」にあるとした。ことに、この「第二神殿時代のユダヤ教」の問題に関して、手島氏はユダヤ学者たちが主張するところの「預言の終焉」が、この問題を理解する上で役に立つと強調する。なぜなら「預言の終焉」は、正典テキスト解釈を中心とした宗教文化の形成をもたらし、合理的で世俗的、また政治的でもあるその「正典解釈の宗教文化」は、非合理的なカリスマ支配を意味していた「預言者の文化」と性格をまったく異にするものであったからである。このようなパラダイムシフトと関連する例として、『ユダヤ古代誌』から神殿崩壊時のパリサイ派、サドカイ派、エッセネ派の動向がとりあげられ、そこで「多数決原理」が確立されていくことが明らかにされる。

市川氏は、宗教から見て社会（国家）はどのように意味づけられるのかという問題意識のもとに、近代（フランス革命）までユダヤ教が正典解釈を多様なものとして残しつつ行動規範の拘束力をラビ達が握っていたのに対し、近代国家（イスラエル）の成立以降においてどこまでユダヤ教の法規範が拘束力を持つのか、という問題を提議した。ギリシア・ローマ・カトリック、プロテスタントを経た西洋の宗教と国家との関係は、フランス革命以後決定的に逆転し、国家は宗教に拘束されない自立的なものとなる。そのような中で、近代のユダヤ人解放によってアイデンティティの危機に直面したユダヤ人社会は、内部から、①啓蒙主義に由来するユダヤ教改革、②直接的宗教体験に由来するハシディズム、③近代科学技術、④ユダヤ人国家建設、という四つの挑戦を受け、ラビ・ユダヤ教体制はしだいに衰退していく。1948年以降、イスラエル国家建設を目前にしたユダヤ人たちは、「トーラーはどのように社会形成に寄与すべきか」という社会的枠組み作りに直面している。その具体的な選択肢として、①トーラーは社会形成を規定すべきである、②トーラーの目指す目標を明らかにし、その実現に適した社会秩序を探求する、③トーラーは社会形成を規定すべきではない、という三つがあげられる。①と③が、比較的に国家の体制に無関心なのに対し、②は宗教者が国家に対してより積極的に関わり、世俗国家の中に宗教的理念を実現しようとする運動を生み出した。

第2回研究会（2005年7月23日）
場所：同志社大学　東京オフィス
大セミナールーム

「比較文明論の観点からみたキリスト教世界の類型化の試み」
加藤　隆（千葉大学文学部教授）
「キリスト教における正典的解釈の可能性――土の器としての正典」
石川　立（同志社大学大学院神学研究科教授）

加藤氏は西洋キリスト教世界の多層構造に注目する。はじめ西洋世界は自由人と奴隷の二層構造であったが、アレキサンダー大王の時代、増大する下層の民の管理の労が上層に強いられることで、社会は不安定になった。これに安定をもたらしたのがキリスト教の国教化である。キリスト教には聖職者と信徒の二層構造が存在している。国教化に伴い社会は聖職者、貴族、民衆の三層構造に変化する。この構造は中世の安定をもたらし、科学の発展を準備した。これが変化するのは啓蒙とフランス革命の時代である。聖職者から権威が剥奪されることで再び二層構造へと移行したのである。聖職者が有していた神との結びつきは神の摂理を認識する自然理性に取って代わられ、二層構造は西洋世界（啓蒙）と野蛮世界（未開）の対比構造となる。科学の発展により増大し続ける富は社会に安定をもたらし、また、その富は下層領域にまで行き渡り当該領域を縮小、同時に大規模な世俗化を促す。これが現在の状況だと加藤氏は述べた。ここで宗教的価値は失われたかに見えるがそうではないとして、加藤氏はフランス革命時代の「最高存在」信仰について論じた。「最高存在」は目のシンボルで表現され、ナポレオンのコンコルダ公布を描いた絵画では、この目に諸宗教が従属させられている。啓蒙主義的宗教ともいえるこの最高存在信仰は、一神教的構造を持っておりこれを研究する必要性を述べ加藤氏は発表を終えた。

石川氏は、はじめに一キリスト者としての立場から発表を行う旨を述べた。日本基督教団の信仰告白には、聖書が信仰と生活との誤りなき規範であると書かれている。しかし、教会の現状を鑑みるにそのようには捉えられてはいない。この正典の権威失墜の理由として、石川氏は啓蒙主義に基づく歴史・批判的聖書学の発展を指摘する。とりわけ新約聖書学における様式史、伝承史的方法は、研究から信仰や神学を排し、聖書を合理化、歴史化して理解しようとする。歴史・批判的研究の立場からすれば聖書は正典とは呼べず、それどころか、その立場にとってはそもそも正典という概念が意味をなさないのである。しかし聖書は研究者だけのものではない。聖書のそもそもの現場は、救済を求め素朴に聖書を読む者の集まりとしての教会であり、この教会には正典が必要なのだと石川氏は述べる。信仰の継承のために、それを唱え黙想するために、議論の土俵として正典が必要である。むしろ、一つのまとまりとして聖書が提供されることで、そこには歴史・批判的研究が捉え得ないような独特の意味空間が現出する。ツェンガーが指摘するように、聖書全体の中にシンフォニーの響きを聞き取ることが重要である。正典は人の作り出した脆い土の器になぞらえられる。これを砕けばそこに収められた証言と真理も共に失われる。バルトは教会教義学を記したが、現在の教会に必要なのは啓蒙主義に基づく聖書学ではなく、教会聖書神学とでも言うべきものだとして石川氏は発表を締めくくった。

第3回研究会（2005年9月8日）
場所：同志社大学　今出川キャンパス
至誠館3階会議室

「スーダンにおける紛争――イスラームとキリスト教、原理主義をめぐって」
イサム・ムハンマド（スーダン・アル・ニーレイン大学教授）
武岡洋治（名古屋大学名誉教授）

武岡氏が最初に、現地調査のデータおよび体験に基づいて、スーダン社会の現状を説明し、次にムハンマド氏が、スーダンにおける宗教的過激集団について報告を行った。

宗教的過激派を生む土壌としては貧困などが代表的に挙がるが、ムハンマド氏は、自身の調査によれば、スーダンの事例では経済的要因より、過激派に導引される者が受けた教育と過激派組織指導者の特異性の方がより直接的な原因になっていると主張した。他の地域と類似した要因として、国内の南北地域間対立、民族間・部族間対立、その他の社会的・政治的紛争、また、キリスト教、イスラーム諸グループや他の土着信仰の間、そして各宗教勢力内部の対立といった主に文化的な対立問題、また、近隣諸国および海外からの外的影響など、様々な事情の作用も付言した。そしてまた、近年ハサン・トゥラービーのようなイスラーム復興主義指導者が多大な支持を獲得していたことには、スーダンの地域的な要因が作用していたと述べた。

部門研究2
「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会

第1回研究会（2005年5月21日）
場所：同志社大学　東京オフィス
大セミナールーム

「共和党保守連合と宗教保守派の関係について」
久保文明（東京大学法学部教授）
「第二期ブッシュ政権の陣容と日米関係」
村田晃嗣（同志社大学大学院法学研究科教授）

久保氏は共和党の保守連合と宗教保守派の関係について詳細に論じ、現在の保守連合を理解する上で宗教というファクターの重要性を指摘した。共和党と宗教保守の同盟関係は、共和党が選挙の支持基盤拡大の為宗教勢力を取り込んだことから始まる。宗教保守の中にも様々な団体が含まれているが、イシューが政治的になればなるほど、宗教保守派の間でも宗派の壁を越えて多数派を形成することが指摘される。この保守連合には多数の争点が存在し、それは保守連合内での緊張を生み出すこともある。そのような争点をめぐる駆け引きは2004年度の選挙にも作用し、ブッシュ再選において同性愛がウィニング・イシューとなったと久保氏はまとめた。

村田氏は二期目ブッシュ政権のセキュリティ・チーム（国務省、国防総省、NSC）の変化と外交戦略を一期目と比較検討した。セキュリティ・チームの変化においては政権がタカ派化したとの議論に疑問を呈し、パウエル前国務長官の役割に対する評価の再解釈を促した。また、P・ウォルフォビッツ（前国防副長官）の世銀総裁就任、J・ボルトン（前国務次官）の国連大使就任は非効率な国際機構の改革にむけた意思表明であり、後者は特に北朝鮮問題への牽制を北京・平壌・ソウルに示すものであるとする。村田氏は二期目の外交政策として「先制攻撃」「民主主義の拡大」「単独主義」を挙げ、「先制攻撃」においては、イラク戦争は米国の「弱さ」を見せたものであり、近いうちに同規模の戦争は起こせず、実質的に後退すると見る。「民主主義の拡大」ではブッシュのラトビアでの演説を引いて、ブッシュ政権の外交路線のウィルソン的なものへの移行を指摘し、大きな後退は無いとする。「単独主義」ではブッシュの二度の欧州訪問から、その理念は残るが方法は慎重になるのではないかと分析した。

第2回研究会（2005年6月25日）
場所：同志社大学　今出川キャンパス
至誠館3階会議室

「米一極構造の中での国連改革」
五十嵐浩司（朝日新聞大阪本社編集局補佐、前ニューヨーク支局長）
「中国と多国間主義」
浅野 亮（同志社大学法学部教授）

五十嵐氏は国連の資料を用い国連改革の分析を行い、日本と米国の国連改革に対する認識の差異とアメリカと国連の関係を論じた。日本での安保理改革の議論と米国での国連改革の議論との間には差異がある。安保理改革は国連改革の一部でしかない。今回国連と安保理の改革の議論が急浮上した原因は創設60周年という時期と、イラク戦争が関係している。さらに国連の制度疲労、ミレニアム・サミットの内容の不履行も指摘されている。そのような中イラク戦争によって引き起こされた安保理の有効性への疑義が決定打となった。しかし国連の中心はやはり安保理であり、安保理の正統性と有効性をどう回復するかが国連改革の議論の核である。しかし安保理の権威を守ることと、安保理に今の世界を反映させより民主的な組織にすることという正統性と、意思決定の迅速さといった有効性の間におジレンマが存在する。賢人会議と米国の「新常任理事国の基準」と「武力行使の基準」に関する認識の差異にそれが表れている。五十嵐氏は国連改革とは国連と米国の関係の問題であり、国連と米国は互いに必要としている事を付言し、今後の関係への期待を述べて報告をまとめた。

浅野氏は「中国と多国間主義（今ある国際社会の基本的な価値や理念を受け入れていくこと）」の問題を自己認識・国際関係・国内政治の枠組から報告を行った。現在の中国の自己認識は鄧小平の死後大きな転換を迎える。2002年の党大会で挙げられた20世紀の三人の偉人に孫文が含まれており（他は毛沢東と鄧小平）、共産党の自己規定は階級から中華民族へ移行したといえる。天安門事件（1989年）以降中国はロープロファイルの立場を取りつつ「できることをする」と言う政策を取る。「できることをする」とは例えばASEAN・東南アジア諸国との接近を指す。90年代、中国は高度経済成長とともに自信を取り戻すが、アメリカの圧倒的な国力を強く認識している。それ故中国のボトムラインはアメリカとの武力衝突を避けることであり、多国間主義を続けていくほかはない。中国と米国の利益の一致から六カ国協議ができたように、多国間主義は中国にとって戦術的な手段である。

第3回研究会（2005年7月9日）
場所：同志社大学　東京オフィス
大セミナールーム

「『共和党の変化』から読むアメリカ政治――保守主義運動と連邦議会」
吉原欽一（社団法人アジア・フォーラム・ジャパン理事長）
「2008年を視野に入れた米国民主党の動向」
中山俊宏（日本国際問題研究所主任研究員）

吉原氏は、保守主義がいかに運動を組織・発展させ、影響力を行使していくことによって共和党を変化させたかという分析を中心に、近年の議会の動向を論じた。保守主義の転機として70年代と90年代の変遷が挙げられ、70年代はヘリテージ財団の設立、ロー裁判を主たる契機とした保守主義の運動、「ニュー・ライト」運動が確立していった。宗教保守勢力（具体的にはカトリック）はこの時期、ロー裁判で自らの意向が認められなかった結果を重く見て、その後他の宗教勢力との協力やロビー活動を顧みることになったという。そのような経緯から「ニュー・ライト」は宗教保守を取り込むことに成功し、またいくつものグラスルーツ・ロビーによって、国内の社会問題だけでなく政策問題への取り組みも視野に入れた運動を展開していった。その後1994年には40年ぶりに共和党が下院議会で多数党となり、アメリカ政治・下院議会の運営体制改革に大きな変化をもたらした。その最も根底的な変革の1つとして1995年ロビー活動公開法がある。吉原氏は、この改正によって元々資金源を補助金に頼っておらず、また同法の規制外でもあるグラスルーツ・ポリティックスの影響力が増し、下院議会、そして連邦政府組織にまで及ぶ保守勢力の連合が創出したと述べた。

中山氏は、2008年の大統領選挙に向けた民主党の取り組みを中心に説明し、同党の2008年選挙に向けた動向を分析した。現在の民主党の状況、および内部からの問題意識の形成で提起される問題点として、元来マイノリティの党であった民主党であるが、現在マイノリティ自体に変化が生じ、以前は、各宗派によってその政治的傾向を考えるのが一般的であったが、現在では「信仰の度合い」で見る方がより現実に近いことなどが挙げられる。2004年選挙の敗退に関しては、民主党側は統一見解があるわけではないが、同党がこれまでにない動員力を発揮して活動していたことでは「接戦であった」し、それにもかかわらず敗れたことでは共和党の「圧勝であった」。そしてまた、2008年選挙に向けた新しい政治インフラの整備への取り組みとしては、ハワード・ディーンを民主党全国委員会長に就任させたこと、「ムーヴ・オン」など527団体組織の動員、SEIU（Service Employers International Union）という労働組合の強化、ヒラリー・クリントンのイニシアティブで設立した「民主党版ヘリテージ財団」、アメリカ進歩センター、ヴィジョンと資金を持った集団として法廷弁護士を取り込むこと、などの試みが観察される。

詳細な内容は、一神教学際研究センターのホームページ http://www.cismor.jp/からご覧いただけます。

2005年度活動報告

4月2-3日
特定研究プロジェクト2:研究会(1)
2005年「イラン研究会」
「革命後26年のイラン・イスラーム体制をめぐる」座談会

4月26日
特定研究プロジェクト5:研究会(1)
発表者: 下村佳州紀(在シリア日本国大使館・専門調査員)
「シリアの現代イスラーム事情」

5月19日
一神教学際研究センター・神学部・神学研究科共催 公開講演会
会場: 同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
ハッサン・アブ・ニマー(ヨルダン王立宗教間対話研究所所長、元ヨルダン国連大使)
「中東における宗教間対話の課題」

5月27日
特定研究プロジェクト2:研究会(2)
「2005年度研究会の方向性と方針について」

6月18日
一神教学際研究センター・日本オリエント学会共催 公開講演会
会場: 同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
小田淑子(関西大学文学部教授)
「イスラームの宗教性――日本人の宗教観と比較して」

6月25日、27日、30日
アラビア語インテンシブ・クラス(アラビア語初級会話)

7月8日
特定研究プロジェクト2:研究会(3)
発表者: 吉村慎太郎(広島大学総合科学部助教授)
「第9回イラン大統領選挙の諸相――予想と実相の乖離に寄せて」

7月25日
特定研究プロジェクト1:研究会(1)
発表者: 宮澤正典(同志社女子大学名誉教授)
「日本におけるユダヤ論議考」

7月29日
特定研究プロジェクト2:研究会(4)
発表者: 富田健次(同志社大学大学院神学研究科教授)
「M・ハータミー『Golge Insan dar Kame Ezhdahaye Doulat』」

7月30日
一神教学際研究センター・神学部・神学研究科共催 公開講演会
会場: 同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
ナーセル・サガフィー・アーメリー(安全保障問題アナリスト、元イラン・イスラーム共和国外交官)
「イランの外交専門家が語る『イランの核開発と核不拡散問題』」

8月1-15日
マレーシア異文化理解・語学研修プログラム

8月2-11日
イスラエル宗教・文化研修プログラム

8月7日
ヨルダン王立宗教間対話研究所と学術交流協定締結

8月8日
マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部と学術交流協定締結

8月16-28日
シリア語学・異文化研修プログラム

9月29日
一神教学際研究センター・神学部・神学研究科共催 公開講演会
会場: 同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
メナヘム・ベン・サッソン(ヘブライ大学教授)
「『カイロ・ゲニザー』――千年にわたるユダヤ教の歴史と文化へのいざない」

10月6日
特定研究プロジェクト2:研究会(5)
発表者: 嶋本隆光(大阪外国語大学留学生日本語教育センター助教授)
「西洋的思考法とイスラーム的思考法(前提的考察)――B・ラッセルとM・モタッハリーの倫理思想」

10月15日
第4回研究会(部門研究2)
発表者: 宮坂直史(防衛大学校総合安全保障研究科助教授)
「ロンドン同時テロと欧米テロ対策の展開――国際安全保障の視点から」
中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)
「自由民主主義の失敗――イスラーム解放党の非合法化を中心に」

10月22日
公開講演会
会場: 同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
塩尻和子(筑波大学大学院人文社会科学研究科教授)
「クルアーン解釈からみるジハード論」

第4回研究会(部門研究1)
コメンテーター: 中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)
「ジハードと『イスラーム世界』」

10月28日
特定研究プロジェクト2:研究会(6)
発表者: 富田健次(同志社大学大学院神学研究科教授)
「近代自由主義とイスラーム――ホメイニーの正義を中心にして(1)」

11月5日-6日
CISMOR国際ワークショップ2005
「東アジアにおける近代化とナショナル・アイデンティティ――グローバリゼーションと宗教復興」

2005年度活動予定

11月18日-29日
日馬相互理解促進学生交換プログラム――日本文化体験研修

11月22日
特定研究プロジェクト1:研究会(2)
発表者: ミシェル・モール(同志社大学嘱託講師)
「宗教者が眺めた20世紀初めのヨーロッパの崩壊――ローゼンツヴァイク『救済の星』を中心として」

12月
『JISMOR(一神教学際研究)別冊』発行

12月10日
CISMORユダヤ学会議
「日本におけるユダヤ学の現状」

1月
第5回研究会(部門研究1・部門研究2合同)
『JISMOR(一神教学際研究)2』発行

2月
アラビア語インテンシブ・クラス
ヘブライ語インテンシブ・クラス

公開講演会のお知らせ
会場: 同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
※入場無料/事前申込不要/逐次通訳有

1)「二本角があらわすもの――西アジアにおけるアレクサンドロス大王の神聖化」
日時: 2005年12月17日(土) 14:00-16:00
講師: 山中由里子(国立民族学博物館助手)

2)「(仮)何のための対話か?――オランダにおけるキリスト者-ユダヤ人関係の歴史的、神学的な中心について」
日時: 2006年1月14日(土) 14:00-16:00
講師: エリック・オッテンハイム(ユトレヒト大学講師)

3)「(仮)イスラームの価値観――欧米との比較において」
日時: 2006年1月21日(土) 14:00-16:00
講師: アフマド・ヴァーエズィー(前ケンブリッジ大学客員研究員)

編集後記

ようやく第3号が出来上がりました。第1号ではエルサレム、第2号ではカイロを特集で取り上げましたが、今回はニューヨークです。執筆者である東先生、大林先生、松永先生は原稿を米国からメールで送ってくださいました。ニューヨークの宗教事情が生き生きと描かれています。お読みになってのご意見・ご感想を是非ともお聞かせください。

ニューヨークと言えば、やはり2001年9月11日の同時多発テロが鮮明に思い起こされます。4年後、衆議院総選挙が行われた今年2005年9月11日も忘れられない日となりました。郵政民営化の是非が争点となり、近年、これほど多くの人々の関心を集めた選挙はありませんでした。こうした是か非かという二項対立図式はひじょうにわかりやすいのですが、あまりにも単純に問題を捉えすぎているのではないかという疑問が生じます。そして、同じような二項対立図式で語られることが多いのが「一神教」なのです。よく一神教vs多神教という図式で、多神教は良くて、一神教はダメ、という発言がなされます。どのような根拠でそうした主張がなされるのか。例えば、多神教は一神教と違い、多様な価値観を認めるものだから良いのだ、という考えがあります。果たしてそうなのでしょうか。そんなに単純に言い切れるようなものではないはずです。『CISMOR VOICE』では「一神教と多神教」というテーマも積極的に扱っていく予定です。日本を代表する宗教都市である「京都」を特集で取り上げ、そこに「一神教と多神教」というテーマを絡ませてみる・・・。いかがでしょうか。特集の企画に関しましても、何かご意見・ご提案などございましたら、編集局までお知らせください。(ネアン)

来訪者記録

日付	氏名	所属機関	国名
2005年			
5月30日	リチャード・ウッド代表	アジアキリスト教主義高等教育支援財団	アメリカ
8月5日	イサム・ムハンマド教授	アル・ニーレイン大学	スーダン
9月1日	カマール・ムハンマド・ハシム社主	スター・パブリケーション	マレーシア
9月17日	ヌル・フダー・イスマイル分析調査員	ナニャン工科大学	シンガポール
	安江勝信	外務省	日本
9月30日	ピエール・フルニエ	関西日仏学館	フランス
	フランソワ・ラショウ	フランス国立極東学院	フランス
10月3日	カラム・ハリール文化参事官	エジプト大使館	エジプト
10月8日	シェムリック・バス参事官	イスラエル大使館	イスラエル

CISMOR事務局編集部
越後屋 朗 澤村容子 高橋 徹 中村明日香 蜂須賀朋彦 藤田敦子

発 行 同志社大学 一神教学際研究センター(CISMOR)
〒602-8580
京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL 075-251-3972
FAX 075-251-3092
E-mail: staff@cismor.jp
URL: http://www.cismor.jp
編 集 CISMOR事務局編集部
執筆協力 井野真由美 小橋川唯之 志賀恭子 高田 太
デザイン 有限会社真之助事務所
印 刷 日本写真印刷株式会社

ニューヨーカーの定番メニュー

多くのニューヨーカーにとって欠かせない朝食の１つとして挙げられるのが、「モチモチ」とした食感が特徴のベーグルである。アメリカのスーパーマーケットへ行けば多種類のベーグルが袋詰めで販売されており、ニューヨーカーたちはそれらを好んで購入していく。

そもそもこのベーグルは、1880 年代に移民によってアメリカへ持ち込まれたといわれているが、ベーグル自体の起源は 1683 年のオーストリアにまで遡る。当時、トルコ軍の激しい攻撃を受けていたオーストリア帝国は、陥落寸前のところをポーランド王国が送り込んだ騎馬隊の協力により、その難を逃れることができた。ポーランド王国の支援に感謝したオーストリア帝国は、ポーランド王子に献上する品をウィーンのユダヤ人パン職人に作らせた。その時作られたものが、ポーランド騎馬隊のシンボルとして用いられていた馬具の「あぶみ」をモチーフにしたリング状のパンであった。

当初、これをオーストリア語で「あぶみ」という意味をさす“ Beugal（ブーゲル）”と称していた。しかし、その後ユダヤ人の間でこのパンが広く食されるようになると、イディッシュ語で「リング」や「ブレスレット」という意味をもつ“ Bagel（ベーグル）”と呼ばれるようになり、これがユダヤ人の移住に伴って世界中に普及していったのである。

1880 年代のアメリカにおけるベーグルは、ユダヤ教の律法に従ったコーシャーデリカテッセン※を代表するパンとして、主にニューヨークの東欧系ユダヤ人社会で消費されていた。しかし、その後ユダヤ系のパン職人や商店がベーグルをユダヤ人以外の一般人向けに販売し始めると、ベーグルは「ニューヨーク・デリ」として広く人気を博し、今日に至っても多くのニューヨーカーが好んでベーグルを食している。

ベーグルの特徴である食感は、発酵させたパン生地をオーブンで焼く前に一度茹でることによって生じる。パン生地は一度茹でると生地内のガスが膨張する。パン生地を事前に膨らませておくことにより、その後オーブンで焼いても生地がそれ以上膨らむことは無く、代わりに歯ごたえのある艶々としたパンができるのである。また、基本的にベーグルは、小麦粉、水、練りこみ素材、塩、砂糖のみで作られているため、コレステロールや油分を含んでおらず、カロリーや脂質も比較的少ない。そのため、健康食品としても注目を集めている。

ベーシックなベーグルの食べ方は、プレーンベーグルにクリームチーズを塗って食べる方法だが、現在市販されているベーグルはバラエティに富んでおり、生地にシナモンレーズンやゴマ、オニオン、ガーリック、ブルーベリー、チョコレートなどの食材を加えたものもある。また、ニューヨークでは、セント・パトリック・デイにちなんで緑色に着色されたベーグルを販売することもある。かつては移民によって持ち込まれたマイナーな食べ物であったベーグルも、今日ではニューヨークという土地にとって不可欠なものになっていると言っても過言ではないだろう。

※ユダヤ教には、食材の摂取可否や調理法の詳細などを定めた食品に関する律法がある。
「コーシャー（清浄食品）」とは、その律法で定められた食材を適切な手法で調理した食品のこと。